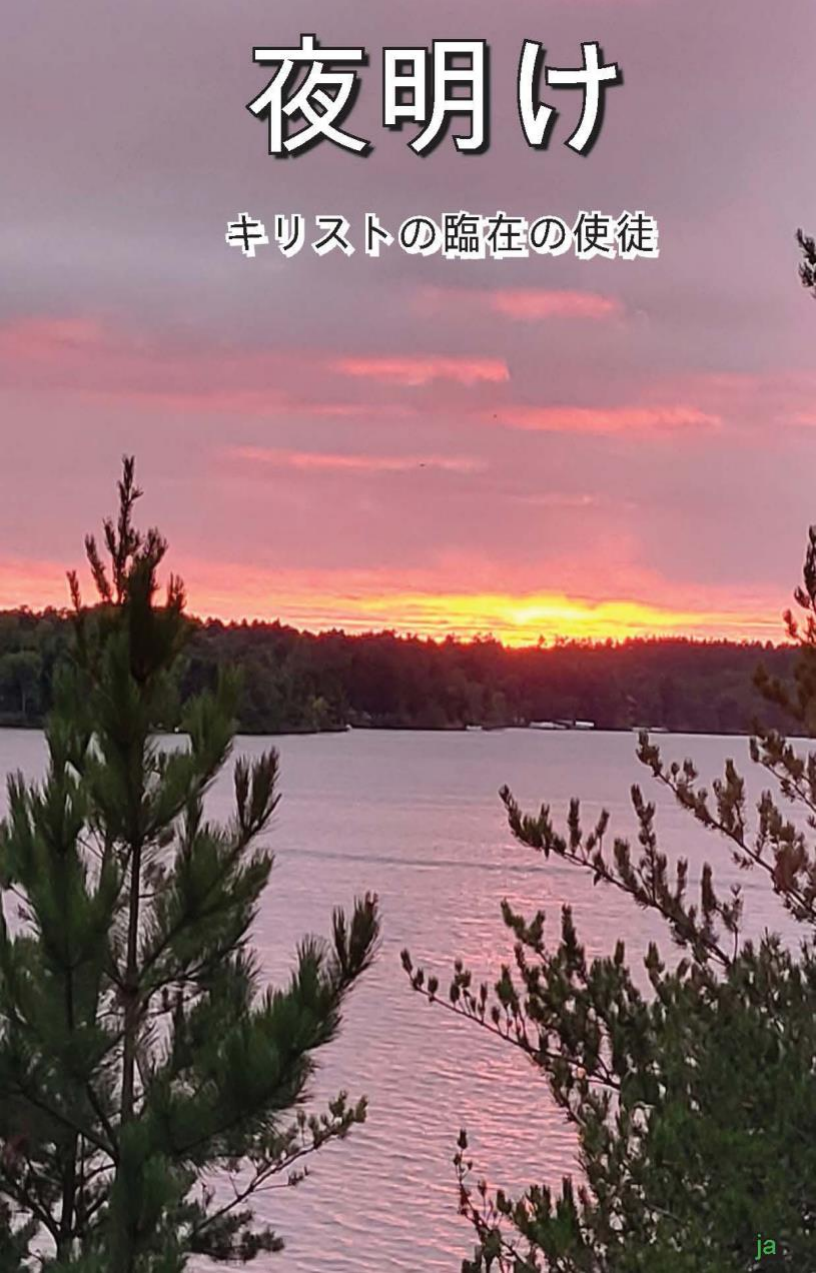
夜明け

キリストの臨在の使徒



ja

『ドーンマガジン』

2026年5月

目次

特集記事 2

ヨブの問いへの答え 2

聖書研究 21

ヨナの誤った憐れみ 21
怠惰に対する警告 24
クリスチャンの寛大さ 27
正しい安息日の守り 30
互いに励まし合うこと 33

キリスト者の生活と教理 36

紅海へのイスラエルの旅 36

聖書を開いて一緒に読み進めましょう！

特集記事

ヨブの問いへの答え

「人は死んでも、再び生きるだろうか？」
ヨブ記 14:14

ヨブが投げかけたこの迫力ある問いほど、万人の関心を集めるテーマはありません。通常、誰も死にたいとは思いませんが、人類の予見の及ぶ限り、死はすべての人類を待ち受けていることを誰もが悟っています。したがって、すべての人の心にあり、多くの人の口に上る問いは、死後の生命があるかどうかということです。

古来より、人々は愛する者の死に対する悲しみや、大敵である死の前での自らの最終的な滅びという確実性の中で、恐怖を和らげ、あまりにも悲劇的に現実的なこの事実を否定するために、あらゆる種類の哲学を編み出してきました。彼らは、死は見た目とは異なるものであるという信念を受け入れてきました。すなわち、死は人間が別の、より崇高な生命の領域へ、あるいは場合によっては永遠の苦しみという状態へと入るための手段であるというのです。

死者はどこにいるのか？人が死ぬと何が起こるのか？死者は生者よりも生き生きとしているのか？数千年前、義人ヨブは冒頭の聖句にある言葉を問いかけた。「人は死んでも、再び生きるだろうか？」ここで神の預言者は、愛する人の喪失を嘆き

、全人類と同様に、避けられない死の到来を恐れてきた何十億もの人々の代弁者となった。

ヨブは、この問いに対する答えに個人的かつ切実な関心を抱いていました。なぜなら、彼はまさに神に「私を死なせてください（　）」と願ったばかりだったからです（ヨブ記14:13）。ヨブは生きることに疲れていたわけではありませんが、苦しみによって疲れ果て、そのような状況下での人生に価値があるのかと自問するほどでした。ヤコブはこう記しています。「あなたがたは、ヨブの忍耐について聞いたことがあるでしょう」（ヤコブの手紙5:11）。　ヨブには忍耐が必要でした。なぜなら、神は彼に激しい災難を許されたからです。彼の羊の群れ、牛の群れ、そして家族はすべて滅ぼされました。彼は健康を失い、全身を覆う忌まわしい皮膚病に冒されました。ついには妻までもが彼に背き、「神を呪って死ね」と言いました。（ヨブ記2:9）

しかし、ヨブには神を呪うつもりは全くなかった。なぜこれほど大きな苦しみを受けることを許されたのか理解できなかったにもかかわらず、彼は神を信頼していた。当然のことながら、もしそれが神の御心であるならば、苦しみからの解放を求め、こう祈った。「ああ、あなたが私を墓に隠してくださり、あなたの怒りが過ぎ去るまで私を隠しておいてくださり、私に定められた時を定めて、私を覚えていてくださるなら！」（ヨブ記14:13）

このように神に死を許してくださるよう求めた後、ヨブは、もし神がその祈りに応え、彼を死へと

導かれるとしたら、そこには何が伴うのかという問いについて深く考えた。　そこで、冒頭の聖句にある言葉を用いて、彼はこう問いかけた。「人は死んでも、再び生きるだろうか。」ヨブは自身の経験と感情の立場から問いかけました。しかし、神の預言者である彼の言葉は神の霊感によるものであり、死後の生に関するこの問いは、その主題に関する神の御言葉の真理にかなう形で表現されていることがわかります。

ヨブが「もし人が死んだら、かつてないほど生き生きとしているのだろうか？」と尋ねたわけでもなく、「もし人が死んだら、それは天国へ行ったのか、それとも苦しみを受ける場所へ行ったのか？」と尋ねたわけでもないことに留意することが重要です。 ヨブは、人が死ぬと （死んだ）ことを知っていた。だから彼が尋ねたのは、「彼は再び生きるだろうか？」ということだった。こうして、死後の命は死者の復活にかかっているという、聖書の偉大で根本的な真理が私たちの注意に喚起される。死後の命への希望があるのは、死が存在しないからではなく、神が御自身の強大な力を使って死者を生き返らせると約束されたからである。　ヨブは、さらなる苦しみから逃れるために死を許されるなら、神が後に彼を生き返らせてくださると信じていました。彼はこう言いました。「私の定められた日数が尽きるまで、私は（死の中で）待ち続け、私の変容（死から生への）が来るのを待ち望みます。あなたが呼びかけられれば、私は答えます。あなたは御自分の御手のわざを喜ばれるでしょう。」ヨブ記14:14,15

復活への希望

ヨブが抱いていたこの復活の希望こそが、新約聖書においてこれほど明確かつ慰めとなる確信をもって示されているものである。使徒パウロはこう記している。「死が人を通して来たように、死者の復活もまた人を通して来たのである。」（コリント人への第一の手紙15:21）。この箇所において、完全な「人」であるアダムは神の律法に背き、自分自身とその子孫に死の罰をもたらした。　完全な「人」であるイエスは、死において罪人の身代わりとなり、それによって復活という手段を通じて、アダムの子孫を死から解放することを可能にされた。これが、パウロが「罪の報酬は死である。しかし、神の賜物は、私たちの主イエス・キリストによる永遠のいのちである」と記した時の意味するところである。（ローマ人への手紙 6:23）

なぜ混乱が生じるのか？

死後の世界に関する多くの混乱の根源は、エデンの園に遡ります。神はアダムにこう言われました。「善悪を知る木の実を食べてはならない。それを食べれば、必ず死ぬ。」　（創世記2:17）。その後、サタンは蛇を通してエバにこう問いかけました。「神は、『園のすべての木の実を食べてはならない』と仰せになったのですか？」エバは、不従順の罰として死が待っているという神の言葉を、その通り確認しました。創世記3:1-3

するとサタンはエバに答えて言った。「決して死ぬことはない。」（創世記3:4）。これは、創造主が言われたことを露骨に否定するものであった。

事実上、サタンは、不従順の罰として死が下ると神が言われたことを、嘘だと非難したのである。おそらくサタンは、何らかの方法で、人間に死の刑を科すという神の御計画を阻止できると信じていたのだろう。もしそうだったとしても、彼はすぐにその試みが無駄であることを悟った。なぜなら、人類は死に始めたからである。

しかし、サタンは自分が間違っていたことを認めようとはしなかった。その代わりに、彼は人間の代理人を通じて、「死は見た目のようなものではない」「死など存在しない」という嘘を広め始めた。人々にこれを信じ込ませることができれば、エバに「決して死ぬことはない」と言った時、彼が真実を語っていたことになる。つまり、死んだように見えるだけであり、死んだように見える時こそ、かつてないほど生き生きとしているのだ、ということになる。

イエスはサタンについて、「彼は偽り者であり、その父である」と語られた。　（ヨハネ8:44）。言い換えれば、サタンは最初の嘘を生み出したのであり、それはこれまでに語られた中で最も破壊的で、広範囲に及ぶ嘘であった。エデンの園に端を発するこの虚偽は、あらゆる国や宗教の人々の心の中で、死に関する真理を歪めてきた。一方、神が「あなたは必ず死ぬ」という言葉で示された真理を信じている者は、それに比べてごくわずかである。

「独立した実体」という虚偽

人間の肉体は死んで元素に還るということは、誰の目にも明らかであった。サタンは、この点に関して人々を欺くことは到底不可能であることを知っていた。それゆえ、彼は、人間の有機体の中に肉体とは別の何かが存在し、それは死の際に肉体から逃れ出て生き続けるとする考えを広め始めた。キリスト教を標榜する界隈では、この定義しがたい何かは「不滅の魂」と呼ばれている。

古代エジプト人はこの見解を信じていた。後に、ギリシャやローマの哲学者たちもこれを採用した。使徒たちが眠りについた後、異教の哲学者たちによって、この考えはキリスト教会に持ち込まれた。表現は様々ではあるが、人間の中には死なない何かが存在し、したがって死などないというこの理論は、キリスト教徒であれ非キリスト教徒であれ、ほとんどの宗教信者にとって共通の信念となってきた。

聖書によれば、この考えはソロモン王の時代でさえ多くの人々の間に広まっており、ソロモン王が真理をもってこの誤りを論破している様子が見て取れる。彼は次のように記している。「人の子らに起こることは獣にも起こる。両者に起こることは一つである。一方が死ぬように、他方も死ぬ。いや、両者とも同じ息を持っている。それゆえ、人は獣より優れているわけではない。すべては空しい。　すべては一つの所へ行く。すべては塵から出たものであり、すべては再び塵に帰る。人の霊が上へ上っていくこと、また獣の霊が下へ下って

地へ帰ることを、誰が知るだろうか（誰が証明できようか）？」（伝道の書 3:19-21）

ソロモンは、死において人と獣は等しく、すべてが同じ息、すなわち伝道の書3章21節で同じヘブライ語が訳されている*「霊」*を持っていると断言し、いかに明確に神の真理を述べていることか。このように真理を提示した後、彼は「誰が知るだろうか［それを否定できるだろうか］」と問いかける。　彼は明らかに、周囲の異教の国々が、死など存在せず、体は死ぬものの*「霊」*は「上」へと昇り、生き続けるとするサタンの嘘を信じていることを知っていた。しかし、ソロモンは、これが真実ではないことを示している。むしろ彼は、死において、人と動物は同じであると述べている。　人間の優位性は、神が復活において死んだ人間を生き返らせることを約束しておられるが、下等な動物に対してはそうすることを約束しておられないという事実にあります。

「不滅の魂」は聖書的ではない

「不滅の魂」という表現は聖書のどこにも登場せず、また聖書は、人間の体の中に独立した実体が宿っており、体が死ぬとそこから逃れて別の場所で生き続けるとは、微塵も教えていない。　聖書で「魂」という言葉が初めて使われるのは、創世記2章7節である。この節では、神が「地の塵」から人を造り、「その鼻の穴にいのちの息を吹き込まれた。こうして人は生ける魂となった」と記されている。

この節は、人が「魂を持っている」のではなく、「生ける魂となった」と述べていることに注目してください。　「生ける魂」とは、単に生き物、すなわち生きとし生けるもののことであり、この聖句が明らかにしているように、それは「いのちの息」と有機体、すなわち肉体との結合によって生じるものです。肉体は魂ではありません。いのちの息も魂ではありません。神の力によって、その息が肉体に命を与えるとき、この二つの結合が「生ける魂」を生み出すのです。

ソロモンは、人と獣はすべて一つの息を持っていると言いましたが、彼は正しかったのです。　大洪水で滅ぼされた人間と下等動物について、次のように記されている。「地の上を動くすべての肉なるもの、すなわち鳥、家畜、獣、地を這うすべての這うもの、そしてすべての人が死んだ。鼻の穴に命の息があるすべてのもの、乾いた地にいるすべてのものが死んだ。」創世記7章21、22節

動物の被造物も、人間を生きさせるのと同じ「いのちの息」によって生きているため、動物もまた「生ける魂」である。　この重要な真理は、翻訳の不整合によって、聖書をざっと読む読者からは隠されている。例えば、創世記1章24節にはこうある。「神は言われた。『地は、その種類に従って生き物を生み出せ。家畜、這うもの、地上の獣、その種類に従って。』そして、そのようになった。」　この箇所における「生き物」という語句は、創世記2章7節でアダムについて言及されている「生ける魂」と訳されているヘブライ語の単語と全く同じものを訳したものである。つまり、「生き物

」と「魂」の両語は、ヘブライ語の「ネフェシュ（nephesh）」の訳語なのである。　翻訳者たちは、聖書が根拠としていない人間と動物との違いを確立しようと努めたため、下等な動物を指す場合には「生き物」という語を用い、人間を指す場合には「魂」という語を用いたのである。ソロモンが「一方が死ぬように、他方も死ぬ」と記したのも無理はない。

正しい考えはソロモンによって明確に述べられている。彼は人が死ぬ時に何が起こるかを説明し、「そうすれば、塵は元のように地に帰り、霊はそれを与えた神のもとへ帰る」と記した。　（伝道の書　12:7）。この箇所に示された単純な真理は、*「霊」*という言葉に対する　な誤解によって、多くの人々の心の中で混乱を招いている。この言葉はヘブライ語の*「ルアハ（**ruach**）」*を訳したものであり、単に「息」を意味するか、あるいはこの場合のように、目に見えない生命の力を指すに過ぎない。

この箇所は、人が死ぬ時に、意識を持った実体が肉体から抜け出し、天の神のもとへ引き上げられるなどということを、微塵も示唆していない。　上記の聖句で使われている*「帰る」*という言葉は、そのような解釈の可能性を排除しています。体は塵に帰るのです。なぜなら、体は塵から来たからです。もし*「霊」*が神のもとへ帰る別の存在であるならば、それは以前神と共に住んでおり、一時的に地上に来て人間の体に宿ることを許されていたということになります。そのような結論がいかに不合理なことでしょうか！

しかし、ソロモンの死の定義は、人間の「生ける魂」あるいは「存在」に関して聖書に記されている事実と、どれほど整合しているのだろうか。肉体と息がそれぞれの源へと戻るとき、「生ける魂」、すなわち「存在」はもはや存在しなくなる。それは死んだのであり、死こそが罪に対する罰である。エゼキエル書18章4節は、簡潔な言葉でこう宣言している。「罪を犯す魂は、必ず死ぬ。」

「眠り」と表現される死

神は死んだ人間を生き返らせると約束されているため、聖書は死んだ人々を「眠っている」と表現しています。この聖書の重要な真理は、マルタとマリアの兄弟であるラザロの死について語ったイエスの言葉によって強調されています。イエスは弟子たちに、「私たちの友ラザロは眠っている」と言われました。　弟子たちは、イエスが通常の眠りのことを言っているのだと思ったので、イエスは彼らに率直にこう言われました。「ラザロは死んだ。」ヨハネ11:11-14

ここでイエスは、神の言葉の基本的な教えの一つを明らかにされました。ラザロは死んでいたのに、同時に「眠っている」のでもありました。　神がアダムに、不従順は死を招くと「あなたは必ず死ぬ」と言われたとき、神は命の消滅を指しておられました。この命の消滅は、神が依然としてご自身の人間の被造物を愛し、人類の贖い主であり死からの救い主となるために、愛する御子を賜物として与え、彼らに贖いを備えてくださらなかったならば、永久的なものとなっていたでしょう。ヨハネ3:16,17；テモテへの手紙第一2:3-6

イエスは、ご自身の「肉」、すなわち人間性を、「すべての人の身代金（ギリシャ語：相応の代価）」として、「世のいのちのために」捧げられました。（ヨハネ6:51）。完全な人であったアダムの不従順は、そのすべての子孫に罪と死をもたらしました。　神の正義は、「命は命で償う」こと、すなわち、アダムに課せられた不従順と死刑の代償として、完全な人であるイエスの死を必要としました。イエスの死は、アダムのための「身代金」、すなわち相応の代価を提供しました。その結果、「神の恵みによって、すべての人のために死を味わう」のはイエスであったのです。（出エジプト記21:23；　ローマ5:12-19；ヘブル2:9）。こうして、アダムとその子孫に対して宣告された死の刑罰を支払うための備えがなされた。すべての人々は今も死に続けているが、キリスト・イエスを通して与えられた贖いにより、死者の復活が約束されている。それゆえ、聖書は彼らの生命のない状態を「眠り」という言葉で表現している。

眠っている者は外界を認識しておらず、死んでいる者も同様である。彼らは何も見ず、何も聞かず、何も知らない。聖書はこう述べている。「生きている者は、自分が死ぬことを知っているが、死んだ者は何も知らない。」（伝道の書9:5）。眠っている者は目覚めることができる。それゆえ、死の中で「眠っている」者もまた、目覚めることができ、そして目覚めることになる。　イエスがラザロについて言われたように、「私は彼を眠りから覚ますために行くのです」（ヨハネ11:11）。死の中で眠っているすべての者は、神の力によって、この地の新しい日の朝に目覚めさせられるのです

。だからこそ、私たちはこう読むのです。「夜は泣くことがあっても、朝には喜びが来る。」（詩篇30:5）

マルタの慰め

イエスとベタニヤの小さな家族――マリア、マルタ、そしてラザロ――は、特別な友人同士でした。ラザロが病気になった時、イエスと弟子たちはベタニヤから少し離れた場所にいました。姉妹たちはラザロの病気についてイエスに知らせを送りましたが、イエスはすぐには彼らのところへ行きませんでした。イエスは二日間待ちました。　その後、イエスはラザロが死んだのではなく眠っているのだと告げ、彼を「眠りから起こしに行く」と宣言されました。（ヨハネ11:1-15）

イエスが家へと近づいてくると、マルタは出迎えた。彼女は優しく咎めるように言った。「主よ、もしあなたがここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょう」（ヨハネ11:21）。マルタは心を痛めていた。これはイエスが彼女を慰める絶好の機会であり、イエスは実際にそうされた。この大きな苦難の時に、主はマルタにどのような心強い慰めの言葉をかけられたのだろうか。イエスは、よく似た状況下で語られるような、「マルタよ、あなたの兄弟は本当に死んだわけではない。彼は単に外側の殻、つまり肉体を脱ぎ捨てただけだ」と彼女に言っただろうか。本当のラザロはかつてないほど生き生きとしている、と彼は言っただろうか。イエスはマルタに、おそらくラザロの「魂」が近くを漂っているのだ、と言った

だろうか。彼は「マルタよ、死などないのだ」と言っただろうか。

イエスは、そのようなことは何も言われませんでした。イエスは以前、弟子たちに「ラザロは死んだ」と告げておられました。ですから、今になってマルタに「お兄さんはかつてないほど生き生きとしている」などと言って、この真実と矛盾するようなことはなさりませんでした。イエスがマルタを慰めるために言われた言葉は、神の御言葉全体の証しと一致するものでした。ラザロが実際に死んでいることを知っていながら、イエスはマルタにこう言われました。「あなたの兄弟はまた生き返る。」ヨハネ11:23

マルタは、この言葉が具体的に何を意味するのか確信が持てなかった。イエスが他の人々を死の眠りから目覚めさせたことは知っていたし、イエスに「あなたが神に何を願っても、神はそれを与えてくださいます」と言ったこともあったが、イエスがその時、神に兄を死の眠りから目覚めさせるよう願うかどうかは確信が持てなかった。彼女は答えた。「私は、最後の日の復活の時に、彼が再び生き返ることを知っています。」　ヨハネ11:22,24

マルタは、すべての死者が総てよみがえる日があり、その時にラザロも死の眠りから目覚めることをはっきりと知っていた。彼女は旧約聖書に記された約束に精通しており、イエスの教えを敬虔かつ信仰をもって受け止めていたため、全人類にとって復活という輝かしい希望があることを知っていた。また、マルタは、その総てのよみがえりが

「最後の日」に起こることも理解していた。　「最後の日」とは、多くの人が思い込んでいるような「終末の日」ではありません。ここでの「日」という言葉は、罪と死から人類を贖い救うという神の偉大な計画における、ある期間、ある時を指しています。

神の救いの計画には、キリストの初臨の前後を問わず、様々な期間、すなわち時代が存在します。これらは準備の時代であり、神は、キリストの統治下にある神の義の王国という神の計画の最終段階において、イエスと協力する者たちを選定し、備えてこられました（ ）。　（エレミヤ23:5；マタイ6:10）。その時、神の計画は、死者の目覚めと、その時点でキリストの王国の律法を信じ従うすべての人々への完全な命の回復によって、その完成を迎えるのである。

マルタは、神の計画におけるこの最終の時代、すなわち「終わりの日」について知っており、その時には自分の兄弟や、すでに亡くなったすべての人々が、死の眠りから目覚めることを知っていた。しかし、マルタは、イエスが「あなたの兄弟は再び生きる」と言ったとき、これがその意味なのかどうかは分からなかったし、イエスもまた、自分の当面の意図が何であるかを彼女に直接説明しなかった。　その代わりに、イエスはこう答えられた。「わたしはよみがえりであり、いのちである。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがない。」　（ヨハネ11:25,26）。イエスは自らを「よみがえりであり、いのちである」と明

言することで、終わりの日にすべての死者を目覚めさせるお方であることを示された。そして、神の王国が到来した際、神の原則に従順となり、その時に心からイエスを信じたすべての人々に、イエスは永遠のいのちを与えることになる。

復活によって人類がよみがえることをマルタに確信させた後、イエスは彼女に「これを信じるか」と尋ねた。マルタは「はい、主よ。あなたがキリスト、神の子であると信じます」と答えた。 （ヨハネ11:26, 27）。マルタは、約束されたキリスト、すなわちメシアが、人類を死から救うためにこの世に遣わされ、それが死の眠りについているすべての人々（ ）の目覚めによって成し遂げられることを、正しく理解していた。彼女は、イエスの中に「復活と命」があると信じていた。

ラザロの復活

マルタは、イエスがメシアであり、死者を生き返らせる力をお持ちであることを告白した後、家に戻り、マリアにイエスに会いに行くよう頼んだ。マリアはそれに応じた。イエスは、この悲しみと大きな喪失の光景に心を動かされ、他の人々と共に涙を流された。それから、ラザロが葬られた墓に案内してほしいと求めた。ヨハネ11:28-35

墓の前に立ったイエスは、入り口の石をどかすよう命じられた。するとマルタは異議を唱えた。彼女は以前、イエスが兄を生き返らせることができると信仰を告白していたが、今は疑い、イエスに言った。「主よ、もう四日も死んでいるので、悪臭がしています。」 （ヨハネ11:39）。イエスにと

って、これは問題ではなかった。イエスはラザロを通して、死んだすべての人々のために神の力が最終的に成し遂げることを示そうとしていた。神の力が働くところでは、人が四日間死んでいたか、あるいは何千年も死んでいたかなど、何の違いもない。命はよみがえらせることができるのだ。そもそも神の器として命を創造された方は、命をもどすことなど、十分にできる方である。

開かれた墓の前に立ち、ふさわしい祈りをささげた後、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロ、出てきなさい。」（ヨハネ11:43）。この記述に何が書かれていないか注目するのは興味深い。ラザロが天国へ行って戻ってきたとは書かれていない。ラザロは天国へ行ってはいなかった。また、彼が永遠の　な苦痛の深淵へ行って、その苦しみから解放されたとも書かれていない。永遠の苦痛の深淵など存在しない。

記録によれば、イエスが「ラザロ、出てきなさい……死んでいた者が出てきた」と叫んだとき、ラザロ、すなわち「死んでいた者」は、死の眠りから目覚めたのである。葬衣を脱ぎ捨てたラザロは、以前と同じように家族や友人たちと交わり、再会した。　命を取り戻した彼は、幻影でも幽霊でもなかった。彼は以前と変わらぬラザロその人であった。彼は再び生き返ったことを喜び、家族も彼が戻ってきたことを喜んだ。

「驚いてはならない」

以前、死者の復活について語った際、イエスはこう言われた。「これを不思議に思うな。墓にいる

者たちがみな、その声を聞いて出て来る時が来る。善を行った者はいのちの復活へ、悪を行った者はさばきの復活へと。」　（ヨハネ5:28,29）。ここで、ラザロが墓から呼び出されたのと同様に、すべての死者が大いなる復活の時に呼び出されることが確約されている。

ここでイエスは、復活において二つの大別があることについても語っておられることに留意すべきである。すなわち、善を行った者と、悪を行った者、あるいは善を行うことに失敗した者である。善を行った者たちは、24節において、現在の時代の「信者」として言及されている。彼らは現世において試練を無事に乗り越えているため、将来の裁きを受けることはない。　イエスを信じ、その足跡を忠実にたどることで「善」を行った彼らは、死から呼び出され、「いのち」の　な復活にふさわしい者と証明されたのです。このようにしてふさわしい者と証明されなかった者たちは、死から目覚めさせられ、裁きを受けることになります。なぜなら、彼らの目覚めは、この世の千年の裁きの日に起こるからです。使徒17:31；ペテロ第二3:8；黙示録20:6

ヨハネ5:29で*「裁き」*と訳されているギリシャ語は*「クリシス（krisis）」*である。今、命に値する者と証明されていない者は皆、死の眠りから目覚めた時、危機に直面することになる。もちろん、その時、彼らはその問題について完全に啓示を受けることになる。　彼らには、完全な理解に基づいて、キリストを通して彼らのために用意された命の備えを受け入れ、その時すでに全人類の事柄を統

治しているであろうキリストの義の王国の律法に従う機会が与えられる。もし彼らがそれを受け入れ、従うならば、彼らは人間としての完全な命に回復され、永遠に生きるだろう。　これが彼らの完全な復活となる。もし彼らがそれを受け入れ、従わないならば、彼らは死へと戻されることになる。そのことについて、ペテロは従わない者たちは民の中から「完全に断ち切られる」と述べた。使徒行伝3:23

キリストと共に生き、支配するにふさわしいと証明された、この時代の信者たちは、復活の際、「栄光と誉れと不死」へと現れるであろう。　（ローマ人への手紙2:7）。したがって、不死は人間に本来備わっている性質ではなく、イエスと共に生きることができるようにと、イエスと共に苦しみ、死ぬことをいとわない者たちに与えられる栄光ある報いであることが分かる。イエスの王国における共同相続人として、彼らはまた、その裁きの期間中、イエスと共に裁きを行う者となる。コリント人への第一の手紙6:2；ヨハネの黙示録3:21；5:10

これは、なんと神の計画の幸福な完結であろうか！エデンの園におけるアダムの背きによってもたらされた罪と死の支配は、永遠に続くことにはならない（　）。この長い嘆きの期間の間に死んだすべての者は、目覚めさせられ、神の律法に従い、地上で永遠に生きるという個別の機会を与えられるのである。

これは人類にとって輝かしい希望であり、神の預言者ダビデはそれを象徴的かつ美しく表現してい

る。引用する。「諸国に告げよ、『主は王となられた』と。世界は堅く立っており、揺るがされることはない。主は民を公平に裁かれる。天は喜び、地は楽しみ、海とその中にあるすべてのものは鳴り響け。　野は喜び躍り、その中のすべてのものは喜び、森のすべての木は喜び歌え。……主は地を裁くために来られる。主は正義をもって世界を裁き、その真実をもって民を裁かれる。」（詩篇96:10-13）。確かに、死後の命は存在する。なぜなら、神の力によって死者は命に甦るからである。これこそが、神の御言葉によって私たちに示されている偉大な希望である。

5月3日のレッスン

ヨナの誤った憐れみ

主要聖句：「主は言われた。『あなたは、この植物を育てたわけでも、育てたわけでもないのに、それを気にかけている。それは一夜にして生え、一夜にして枯れた。それなのに、わたしがニネベという大いなる町を気にかけないはずがあるだろうか。
ヨナ書 4:10,11

関連聖句：
ヨナ書 3:1-5; 4:1-11

ニネベは、イスラエルの敵の一つであるアッシリア帝国の首都であった（列王記下19:36）。神は預言者ヨナに、ニネベの人々の悪行ゆえに、40日後に彼らを滅ぼすと告げるよう命じられた。　ヨナの宣言を聞いた王は、「人も獣も」食事をせず、水も飲まず、皆が「神に向かって大声で叫ぶ」よう布告した。すると、「彼らはその悪の道から立ち返った。神は心を改め、彼らに脅かしていた滅びをもたらさなかった。」ヨナ書 1:2; 3:1-10

しかし、このことに「ヨナはひどく不快に思い、激しく怒った」。　ヨナは神に言った。「私は、あなたが恵み深く、あわれみ深く、怒るのを遅くし、大いなる慈しみを持ち、災いを下すことを思い直される神であることを知っていました。主よ、どうか私の命をお取りください。生きるよりは死

ぬほうがましです。」すると主は言われた。「怒るのは正しいことか。」ヨナ書4章1-4節

おそらくヨナは、数世代にわたりアッシリア人が自分の民に対して行った残虐な扱いを心に留めていたのだろう。彼は裁きが下され、この国が滅ぼされるのを切望していたのかもしれない。（イザヤ書第36章）。大いに失望した預言者は、町を去った。彼は近くの丘の中腹に腰を下ろし、自分で作った小屋の陰に身を隠して、「この町がどうなるか」を見守った。（ヨナ書4:5）

すると、「神はヨナの上に日陰となるように」ひょうたんを「生えさせ」、預言者は「大いに喜んだ」。しかし、翌朝、神がまた用意された虫が、そのひょうたんを食い荒らした。太陽が昇ると、それは「ヨナの頭に照りつけ、彼は……心の中で死にたいと願った」。ヨナ書4章6-8節

神はヨナに言われた。「そのひょうたんがなくなったからといって、善を行うことがあなたにとって不快なのか。」「あなたは、労せずして育てたわけでもない、一夜の産物であり、一夜のうちに滅びたひょうたんを憐れんだ。それなのに、私がニネベを憐れんではいけないというのか。」（ヨナ書4:9-11）　「一夜の子」という表現は、何かが「はかない」性質を持つことを指す際に用いられた。主は、植物に対するヨナの関心と憐れみと、ニネベの人々に対するそれとの間の大きな対比を指摘しておられたのである。

ヨナは、アッシリア人が過去に犯した悪行に対する復讐を望んでいたが、それゆえに、彼らが今や神の前で悔い改めているという事実を見失ってい

た。神はニネベの人々の行い、すなわち「彼らがその悪しき道から立ち返り」、生活と行いを改めたことをご覧になった。それこそが、主を思い直させた理由であった。

イエスは、ヨナ書にあるこの記述の真実性と、ニネベの人々が真に悔い改めたこと（　）を確証されました。（ルカ11:29-32）　この箇所の31節と32節は、ニネベの人々を含むすべての死者が、将来の地上の王国において復活することを証明しています。その時、イエスの初臨の際にイエスを批判し迫害した者たちに対する裁きは、イエスの説教や奇跡を見たことも聞いたこともない者たちに対する裁きよりも、厳しいものとなるでしょう。私たちへの教訓：与えられた知識には責任が伴うのです。ルカ12:48

怠惰に対する警告

鍵となる聖句：「わたしはあなたがたにすべてのことを示しました。すなわち、このように労苦し、弱い者を支え、主イエスの言葉を覚えておくべきであることを。主イエスはこう言われました。『与えることは受けることよりも幸いである』と。」

使徒行伝 20:35

選読箇所：

使徒行伝 20:33-35；テサロニケ人への手紙第二 3:6-12

使徒パウロは、第三回伝道旅行の終盤に、港町ミレトスに到着した。船の出発を待つ間、彼は近くのエフェソスの長老たちに、会いに来てくれるかどうか尋ねる便りを送った。これがパウロが彼らに会う最後の機会となるはずだった。

長老たちが到着すると、パウロは「私があなたがたの間で、謙遜と涙と試練の中で、主に仕えて過ごしてきた生活」を振り返った。そして、「私は公の場でも、あなたがたの家でも、あなたがたを教えることを決してためらわず、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、神に立ち返り、私たちの主イエスを信じる必要性を力説してきた」と述べた。使徒行伝20:18-21

パウロは長老たちに、「あなたがた自身と、すべての群れに注意を払いなさい」と、「神の教会の羊飼いとして務めなさい」と促した。（使徒20:28

）。ここでパウロは、長老たちが自分自身と、主が彼らを副牧者として任じられた兄弟たちとの双方に対して、二重の責任を負っていることを指摘している。「注意しなさい」、すなわち、自分の行いだけでなく、その動機についても警戒し、吟味しなさいということである。

そしてパウロは彼らにこう言い聞かせた。「私は、だれもの銀や金や衣服をも欲しがったことはありません。あなたがた自身も知っているとおり、この私の両手は、私自身の必要と、私と共にいる人々の必要を満たしてきました。」（使徒20:33,34）。　パウロは生業として「天幕職人」であり、他の人々に福音を宣べ伝え、教える一方で、自らの生活必需品を賄うために、「あなたがたに負担をかけないため」に「昼も夜も働いた」と証言しています。使徒行伝18:3、テサロニケ人への手紙第一2:9、テサロニケ人への手紙第二3:8、コリント人への手紙第一4:12

別の訳から今日の聖句を引用すると、パウロは次のように締めくくっています。「私はあらゆる点であなたがたに模範を示しました。私がこのように働くのを見て、あなたがたも弱い者を助け、主イエスの御言葉を心に留めるべきであることを示したのです。主ご自身が、『与えることは受けることよりも幸いである』と言われたからです。」たとえ与えるお金がなくても、私たち一人ひとりに、他者に対して寛大になる機会は豊富にあります。同情や励ましの言葉、あるいは単に優しい眼差しさえも、落胆している人にとっては、一握りの金よりも価値があることがあるのです。

「与える人」であるということは、自分自身よりも、他者とその必要についてより多く考えることを意味します。「怠惰」であることは、与える人であることの正反対であり、一種の利己主義であり、霊的な弱さにつながる可能性があります。 （テモテへの手紙一 5:13）。パウロは怠惰を働く兄弟たちに対して大胆に語り、「働こうとしない者は、食べることもあってはならない」と述べ、「静かに働き、自分のパンを食べる」よう戒めました。テサロニケの信徒への手紙二 3:7-12

幸せなクリスチャン生活における重要な要素の一つは、他者に対して「心から」与える術を身につけることです。「神は喜んでする献げ物を愛されるからです。」（出エジプト記25:2；2 コリント人への手紙9:7）。そうすることで、私たちは神に似ていきます。なぜなら、神こそが最も偉大な与え主だからです。「神は、御独り子をお与えになった。それは、御子を信じる者が一人として滅びることなく、永遠の命を得るためである……世界が御子によって救われるためである。」ヤコブの手紙1:17；ヨハネによる福音書3:16,17

クリスチャンの寛大さ

鍵となる聖句：「あなたが畑で刈り入れをしているとき、束を一つ残しても、取りに戻ってはならない。それを、寄留者、孤児、または未亡人のために残しておきなさい。そうすれば、あなたの神、主は、あなたが手掛けるすべてのことを祝福してくださる。」
申命記 24:19

選読箇所：
申命記 24:14-22

『申命記』には、モーセが死の直前にイスラエルの民に伝えた最後の言葉が記されています。この言葉の目的は、神が過去に彼らの民に与えた教えを覚えて実践するよう、彼らに戒めることでした。その教えの一つが、今日の鍵となる聖句に記されています。この規定に関する説明は、その前の節に見られます。　「あなたがたはエジプトで奴隷であったが、主なる神がそこからあなたがたを贖い出された。それゆえ、わたしはあなたがたにこれを命じる。」申命記 24:18

イスラエル人は、無力で困窮している人々を無視してはなりませんでした。むしろ、彼らは意図的に、畑に残されたものを、彼らが自分のために拾い集められるようにしなければなりませんでした。　この指示の理由は、彼ら自身もエジプトで奴隷であった時、無力で困窮していたからです。ここでの教訓は、他者への配慮です。これは神に似た

性質の一面です。なぜなら、神ご自身がこの原則を適用されてきたからです。神の計画において、神は貧しく無力な人類を顧みてこられたからです。

完全な人間であったアダムがエデンの園で神の命令に故意に背いたとき、下された罰は死であり、それはその後、代々の人間へと受け継がれていきました。（創世記2:16,17）。すべての人間は罪の中に生まれ、不完全であったため、誰も「いかなる手段によっても兄弟を贖うことはできず、神に彼のための身代金を支払うこともできなかった」のです。（詩篇49:7; 51:5）

神の正義を満たすことのできるのは、罪のない完全な人間の生涯だけでした。すなわち、完全な人間であるイエスが、完全な人間であったアダムの不従順の代償として、その生涯を捧げたのです。（出エジプト記21:23；ローマ人への手紙5:12,19）神は、御独り子であるイエスを完全な人間としてこの世に遣わし、イエスが自ら進んで「すべての人の身代金」として命を捧げることで、神の正義を満たし、人類の一人ひとりを贖われたのです。（ヨハネ3:16,17；テモテへの手紙第一2:5,6；ペテロの手紙第一3:18）

神がイスラエルの民をエジプトの奴隷制から解放されたように、キリストの足跡をたどる者たちをも、罪と死の奴隷制から解放されました。（ヨハネ8:35,36；コリント人への手紙第一15:22）。私たちは常にこのことを心に留め、まだ福音を聞いていない人々や、まだそれを信じていない人々に対して、愛と憐れみを示すべきです。

宗教とは全く無縁でありながら、病気や愛する人の死といった困難な人生の経験をしている人々に遭遇することがあります。（ローマ8:22）。私たちは、神がイスラエルに与えられたこの教えにある「外国人、孤児、やもめ」のように、彼らを扱うべきです。そのような人々は、神の御言葉を聞く機会や信じる機会がなかったかもしれませんし、あるいはその心が御言葉に対して盲目になっているかもしれません。

私たちは彼らに対して愛と思いやりを持つべきです。可能であれば、真理の「種」を彼らと分かち合うべきです。そうすることで、すべての人のための復活への信仰の聖書的根拠や、まもなく全地に臨む素晴らしい御国の祝福について、彼らに伝えることができるでしょう。　（コリント人への手紙第一 15:21,22；ヨハネの黙示録 21:1-5）。彼らが今この良き知らせを受け入れるか、あるいは私たちが真理と希望の種を蒔き、それがキリストの王国において彼らの心の中で芽吹くことになるかもしれません。

正しい安息日の守り

主要聖句：「イエスは彼らに言われた。『安息日は人のために設けられたのであり、人が安息日のために設けられたのではない。それゆえ、人の子は安息日の主でもある。』」
マルコによる福音書 2:27,28

選読箇所：
マルコによる福音書 2章23-28節

神がイスラエルに与えられた第四の戒めは、次のとおりであった。「安息日を覚えて、それを聖なるものとしなさい。……その日には、いかなる仕事もしてはならない。」（出エジプト記20:8-11）。神はこの戒めの意味を次のように説明された。「これは、あなたがたの代々にわたって、わたしとあなたがたとの間のしるしである。あなたがたが、わたしがあなたがたを聖別する主であることを知るためである。」出エジプト記31:13,14

神は預言者イザヤを通して、この戒めのより深い意味を次のように明らかにされました。「もしあなたが安息日を喜びとし、主の聖なる日を尊いものと見なし、自分の道を行かず、自分の快楽を求めず、むなしい言葉を語らないことでそれを尊ぶなら、あなたは主を喜ぶことになる。」イザヤ書58:13,14

毎週この一日の休息の目的は、単に肉体の安息のためだけではなく、預言者イザヤを通して説明されているように、神について思いを巡らせ、喜び

をもって神を敬う日となることでした。イエスや使徒たちは、教会に対して安息日に関する戒めを何も与えませんでした。パウロが書いたように、「あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるのです。」ローマ人への手紙 6:14,15

しかし、イエスの初臨の頃、多くのユダヤ教の指導者たちは形式主義者となり、戒めの深い意味よりも文字通りの規定を重視するようになっていた。この出来事において、ファリサイ派の人々は、イエスの弟子たちが麦畑を通りかかった際、空腹だったため、手にした麦の穂をこすり合わせて食べたことを理由に、安息日違反であると非難した。ルカ6:1,2

イエスは安息日の戒めを破ったわけでも、他のユダヤ人にそうするよう教えたわけでもありません。イエスはユダヤ人であり、安息日を守る義務がありました。しかし、神の戒めに対する理不尽な誤った解釈には反対されました。その結果、イエスはこの箇所で、「安息日は人のために設けられた」と説明されたのです。

「安息日」という言葉は、休息を意味します。別の箇所で、パウロは「私たち信じる者は、その安息に入るのである」（ヘブル人への手紙4章3節）と記しています。それは、ユダヤ人の文字通りの肉体的な休息ではなく、主への信仰と信頼による休息なのです。　使徒は続けてこう言います。「それゆえ、神の民には、まだ安息が残されています。神がご自身のわざを休まれたように、その安息に入った者は、自分のわざも休んだのです。ですから、だれも不信仰の同じ例に倣って倒れること

のないように、その安息に入るために努めましょう。」ヘブル人への手紙 4:9-11

一見すると、「安息に入る」ために「努力する」というのは矛盾しているように聞こえるかもしれません。　しかし、この勧めに重要な真理が示されています。この安息とは、神への完全な信仰と神への依存を育むために日々努力することによって入るものです。それは、知識、確信、そして従順に基づいた、神の約束への完全な信頼による安息です。御子イエス・キリスト（　）を通して神と結ばれている関係ゆえに、私たちはこの安息の中に霊的な力を見出すのです。

そのような安息は、神と神のすべての約束に対する私たちの信仰の度合いに比例するものです。したがって、主に従う者にとって、毎日が安息日、すなわち休息の日であるべきです。それは、私たちのすべての思い、言葉、行いにおいて、喜びをもって主を思い巡らし、主を尊ぶという意味でも、そうであるべきなのです。

互いに励まし合うこと

鍵となる聖句：「互いに愛と善行を励ますために、互いに気遣い合いましょう。」
ヘブル人への手紙 10:24

選読箇所：
ヘブル人への手紙 10:22-25

通常、「励ます」という言葉は、怒りや悪意をかき立てることを指すのに使われます。しかし、この鍵となる聖句において、使徒はこの言葉を、善への促し、すなわち愛と善行におけるクリスチャンの成長を促すことを表すために用いています。この表現の別の訳し方として、「互いに励まし合う」というものもあります。

互いに愛と善行、すなわち行いに励まし合うことこそが、主の弟子たちが集まる際の真の目的です。私たちは皆、同じ尊い信仰を持つ者たちとの交わりから得られる助けと励ましを必要としています。また、使徒は、「その日が近づいているのを見る」につれて、兄弟たちとの交わりがますます不可欠になることを強調しています。ヘブル人への手紙 10章25節

愛と善行に向けて互いに適切に励まし合うために、使徒はまず「互いに配慮し合う」必要があると指摘しています。これは、他者の試練、困難、弱さを思いやり、彼らに対する心の共感を育む必要があることを意味します。「互いに励まし合い」、愛と善行へと向かわせるというこの勧告には、

美しい霊的なバランスが示されています。愛も善行への熱意も、互いに切り離して考えることはできません。　真のキリスト教の愛は、善行として現れない限り存在し得ません。　また、真のキリスト教の愛の成果あるいは現れでない限り、主の御目には善行と見なされる行いも存在し得ません。

善行は、使徒パウロによって別の箇所で「愛の働き」と表現されています。　（テサロニケ人への手紙第一 1:3）。これは、真の愛が「労する」、すなわち働くことを示しています。そのような愛は、神に喜ばれることだけで十分であるかのように、愛の行いを伴わない単なる優しい気質ではありません。私たちのクリスチャン生活を満たし、支配すべき愛は、神の愛、すなわち堕落した人類に対する天の父の態度の中にあり、その父が持ち、模範を示された愛です。　神は、堕落した人類をこれほどまでに愛されたため、神が与えることのできるものの中で何よりも大きな代価を払って、御自身の独り子であり、深く愛された御子イエスを与えてくださいました。（ヨハネ3:16）。イエスにおいて、私たちは真の愛と善行が完全に融合した模範を見ることができます。もちろん、私たちは救い主が行われたすべての行いを実行することはできませんが、可能な限りすべてを行うように促す精神を養うよう努めることはできます。

新約聖書で*「交わり」*と訳されているギリシャ語*「コイノニア」*は、*「パートナーシップ」*を意味します。（ガラテヤ人への手紙2:9、ピリピ人への手紙1:5、ヨハネの手紙一1:6,7）。 クリスチャンの交わりとは、単に集まって共通の信仰について話

し合うこと以上のものです。互いに集まろうとするその願いは、罪に呪われた人類の世界を啓蒙し救うという神の偉大な計画において、神と共に働く者として神に召されたという自覚から生じるべきものです。コリント人への手紙第二 5:17-21; 6:1

パウロは、私たちが分かち合うよう招かれた働きを強調し、次のように説明しています。「神はキリストのうちにあって、世をご自身と和解させ……私たちに和解の言葉を委ねられました。それゆえ、 、私たちはキリストの大使なのです。」 （Ⅱコリント5:19,20）。これは、もし私たちが死に至るまで忠実であれば、失われた人類の世界を神のもとへと和解させるという偉大な働きに、私たちの頭であるキリストと共に参与することを意味します。これは、主に従うすべての者がパートナーとなる共通の働きです。この大義に関連して、互いに忠実であるよう「促し」あるいは「励まし」合うことは、私たちが集まる際の第一の目的であるべきです。

紅海へのイスラエルの旅

「これらのことは、彼らに起こったことですが、それは私たちへの戒めとして記されたのです。私たちは、世の終わりの時代を生きる者たちなのです。」

コリント人への手紙第一 ***10:11***

エジプトの初子たちが死に、イスラエルの初子たちが免れた後、ファラオはイスラエル人を去らせることを決意しました。（出エジプト記12:29-32）。波乱に満ちた過越の夜の翌朝、彼らはラメセスに集まり、神がアブラハムに約束された地、カナアンへの旅を始めました。（創世記15:18-21；出エジプト記3:8）。 冒頭の聖句で、使徒パウロは、イスラエル人に起こった出来事は、私たちの学びのための「手本」、すなわち「型」として記されていると述べています。クリスチャンとして、私たちは神がこれらの古代の人々に対してなされた御業から教訓を引き出し、彼らが犯した過ちを避け、彼ら以上に神の御手による守りへの信仰を深めることができるのです。

イスラエル人が旅立ちの地としたラメセスは、この奴隷とされた民がファラオのために築いた「宝の都」の一つでした。（出エジプト記1:11; 12:37）。ラメセスはまた、彼らを虐げたファラオの称号でもあり、イスラエル人が約束の地カナンへの旅を始める出発点となったこの都市にとって、これ以上ないほどふさわしい名前となっています。 エ

ジプト人は太陽を崇拝していた。彼らの太陽神は「ラー」であった。このファラオが、自ら「太陽の子」を意味する「ラムセス」という称号を名乗ったことは、驚くに値しない。　しかし、真理の観点から言えば、ラムセスは実際にはエジプトにもイスラエル人にも光をもたらした者ではなかった。イスラエルの民を奴隷として苦しめ、彼らが救いを叫ぶに至らせたのは、他ならぬ彼であった。彼らの神、すなわちアブラハム、イサク、ヤコブの神は、その叫びを聞き、彼らを救い出された。出エジプト記2:23-25; 3:7-10

この点に関して、今日のクリスチャン、すなわち霊的なイスラエル人に対する神の御業との間には、興味深い対応関係がある。（ローマ8:14；ヘブル3:5,6；ペテロ第一2:5,9,10）。私たちにも、いわば、私たちを圧迫するファラオがいる。それはサタンであり、元の名はルシファー、すなわち「光の担い手」を意味する。　昔のファラオと同様、彼は真の光とは程遠い存在です。それにもかかわらず、彼は様々な欺瞞の手法を用いて、「光の天使」として現れてきました。（コリント人への手紙第二 11:14）。サタンの導きのもと、神を信じる者たちは、真の神の都を装った巨大な教会組織、すなわち「宝の都」を築くように導かれてきたというのは事実です。　しかし、エジプトが単に巨大な教会組織を象徴しているわけではないことに留意すべきです。それは、それらの「宝の都」がエジプト全体を構成していたわけではないのと同じです。エジプトは、より具体的には、神の霊的なイスラエルの民が皆、いつの時代にも奴隷とされてきた、この世、すなわち闇と死の王国を象徴してい

ます。ローマ人への手紙8:21-23；ガラテヤ人への手紙4:1-7

イスラエルの奴隷たちは、自らの解放について何もできなかった。エジプトからの解放は、神によって成し遂げられたのである。また、神は、その至高の摂理と、より偉大な過越の小羊であるイエスの流された血を通して、　私たちの解放、すなわち贖いをもたらしてくださる。（ヨハネ1:29；コリント人への手紙第一5:7）　この点に関して留意すべきは、過越の小羊の血がエジプトからのイスラエルの救いをもたらしたとはいえ、それが必ずしも彼らを約束の地へと導いたわけではないということです。今日の霊的なイスラエル人についても同様です。神はイエスの血によって私たちを救い出してくださいましたが、最終的に天のカナアンに入るためには、召しの条件に対する継続的な忠実さが必要です。

過越の血によって彼らを救い出された神への継続的な信仰こそが、イスラエル人が約束の地へ最終的に入るための唯一の保証であった。過越の小羊の血をまぐわや戸口に振りかけるというこの信仰の実践は、神によって彼らの従順の現れとみなされた。　（出エジプト記12:22,23）。この同じ程度の信仰を継続して実践しなかったことは、神によって彼らの不従順の現れとみなされた。神は、彼らがただ塵に過ぎないという彼らの性質を覚えておられ、長い間彼らに忍耐してくださった。　（詩篇103:14；ローマ人への手紙第11章）。しかし、彼らが疑い続け、神を忘れ続けたため、神はついに彼らとの戦いをやめることになった。この信仰

と従順を継続できなかった失敗ゆえに、神は彼らをエジプトへではなく、荒野へと引き返し、そこで死なせたのである。（民数記14:22,23）。　冒頭の聖句の言葉をよく心に留めましょう。そこでは、パウロが、イスラエルに起こったことは、私たちへの戒めとして起こったのだと語っています。彼らの不信仰と不従順の例が、私たちにとっての警告となり、私たちがより忠実に歩み、召された「召命にふさわしい」者となる助けとなりますように。エペソ人への手紙4章1節

神を軽んじてはなりません。また、神が私たちのためにしてくださったことを、ありふれた平凡なこととして扱ってはなりません。　かつて私たちがまだ罪の中にいた時に、イエス・キリストの流された血によって救いを与えてくださったからといって、私たちがますます深まる感謝と信仰の証しを示さなくても、神が引き続き私たちに御手を差し伸べてくださると、決して当然のこととして受け止めてはなりません。神がすでに私たちのためにしてくださったことへの感謝を示すのは、私たちの信仰と神への従順を通してなのです。　使徒が「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません」（ヘブル人への手紙11:6）と述べたとき、間違いなくこれを意味していたのです。もし私たちが、神への信仰を強め、神とその御業に対する熱意を高める手段として、神の「霊的な祝福」を用いないのであれば、神が引き続き私たちにその祝福を注ぎ続けてくださると考えるのは理にかなっていません。エペソ人への手紙1:3

「定住の地なし」

イスラエルの民は皆、約束の地へと出発する準備が整い、神が彼らに与えようとしておられる救いを受け入れる用意ができていました。そこで、彼らはラメセスに集まり、そこからスコトへと旅立ちました。（民数記33:5）　「スコト」という名は*「仮庵」*を意味し、カナンへの旅路が、エジプトでの隷属からの解放と自由をもたらす一方で、エジプトの自宅が間違いなく提供していた多くの便利さや必需品を自ら断つよう、彼らに求めていたという事実を、よく思い起こさせてくれる。

もはやイスラエル人は、家や頭上の屋根による保護を享受することはなかった。それ以来、彼らは約束の地に着くまで、天幕の中で生活しなければならなかった。ここには、安息の天のカナアン（）へと巡礼の旅を始めた霊的なイスラエル人への教訓がある。彼らが今まさに旅している道中の苦難から彼らを守ってくれるような「永遠の都」など存在しないのである。（ヘブル人への手紙 13:14）。　天の父の霊的な子として、約束の霊的な地へと旅を続ける私たちは、保護を物質的なものに求めません。その代わりに、私たちはそれぞれ、神が見守ってくださる一時的で質素な住まいに住み、神が決して眠ることなく、休むこともないという確信を持っています。　（詩篇121:3,4）。あらゆる必要の時に与えられる神の恵みと保護という尊い約束は、そうでなければ私たちを圧倒してしまうであろう嵐や激しい試練と私たちとの間に、祝福された天蓋を張ってくれます。ヘブル人への手紙4:16

イスラエルの民は、神が備えてくださった雲の天蓋の下を旅しました。（出エジプト記13:21,22）。これは、私たちが囲まれている神の恵みの限りなさを思い起こさせると同時に、「神を愛する者、すなわち、神の御計画に従って召された者たちにとっては、すべてのことが共に働いて益となる」という事実を思い出させてくれるでしょう。　（ローマ人への手紙　8:14-17,28）。この恵みは、妨げられたり、損なわれたりしてはなりません。地上の雲が、私たちと神との間に立ち入ることを許してはなりません。私たちは常に、神の恵みと愛の覆いを見上げ、それによって神の憐れみと配慮をますます深く実感できるようでなければなりません。　しかし、私たちに対する神の愛と恵みは、必ずしも人生の楽しい経験の中だけで現れるわけではないことを覚えておくべきです。主が私たちに許される試練や苦しみも、同様に神の愛の現れなのです。私たちは、「主と、その力強い御力」の中で強くなるためにも、これらの経験が必要なのです。エペソ人への手紙 6:10

例として、同じ種類の植物を二つ考えてみましょう。一つは、光や新鮮な空気が遮断された地下室で育て、もう一つは開放的な庭で育てます。数週間後、二つの植物の違いに注目してください。一方は健康で力強く、もう一方は弱々しくもろくなっているでしょう。地下室の植物は風や雨から守られていますが、まさにその保護こそが、植物が強くたくましく成長することを妨げているのです。　一方、屋外で育てられた植物は、太陽の光がもたらす栄養と、雨の活力を与える湿気の助けを借りて、自然の要素と闘いながら強くなります。こ

の広大な天の天蓋の下で、植物は、その成長と強さに寄与するあらゆる要素や要因のおかげで、力強く育つのです。

真の霊的なイスラエルの民は、キリストに成長していく過程において、神の恵みのあらゆる段階を経験します。この経験こそが、忠実なクリスチャンを真に強くするのです。木に吹きつける逆風こそが、木をますます強くし、それに応じて根を地中深く伸ばさせるのです。しかし、その木が嵐に耐える力を与え、維持と生命の不可欠な手段となるのは、やはり日光であることを忘れてはなりません。　私たちもまた、人生の嵐に立ち向かうことによって強くなりますが、死に至るまで忠実であり続けるための励ましと能力が与えられるのは、神の恵みの陽光によるのです。

イスラエルの民が荒野の旅を始めた当初の熱意は、長くは続かなかった。このことは、もし私たちが自分自身を注意深く見守らなければ（　）、私たち自身の経験の中で何が起こり得るかを、非常に鮮明に示している。私たちの「初めの愛」を失う可能性、いや、危険さえあるのである。　（黙示録2:4）。民数記33章6～8節によると、イスラエル人は当初、おおむね東へと進んでいたようですが、突然、南へ方向転換するよう命じられました。彼らにとって最も自然な選択は、東へ進み続けることだったでしょう。そうすれば、紅海の北側に流れる小さな小川にたどり着けたはずであり、そこなら確実に渡るのも容易で、彼らの目的地であるカナアンへの道筋もより直線的だったからです。

イスラエル人の進路は一貫性を欠いているように見えます。なぜなら、ファラオの支配地域との距離を広げるどころか、逆に縮めてしまっていたからです。それだけでなく、約束の地との間の障壁を高くしてしまっていたのです。しかし、この移動は神の導きによるものであったというのが説明です。聖書の記述には、「主は彼らの前を行かれ……彼らを導かれた」とあります（出エジプト記13:21）。

神の導きに従う

霊的なイスラエル人にとって、神が導かれる時、それは肉的な進歩の道ではなく、むしろその正反対の方向である場合がしばしばあります。それは、神の恵みと力がより大きく示されるためです。私たちは自分の道を選んではいけません。たとえその道が時に最も危険に見えるとしても、常に神に私たちの進路を導いていただかなければなりません。　「人の目には正しい道のように見えるが、その終わりは」私たちが望む完全な救いではない。箴言14:12

もし自分の道を選ぶことを任されれば、私たちは自然の傾向や好みに従う傾向があります。肉の道とは、通常、抵抗が最も少ない道に従うことです。しかし、そのようでは、神は栄光を受けられず、私たちの信仰も正しく示されることはありません。向こう岸が見えている間は信仰を持つのは容易ですが、霧が立ち込め、肉眼の視界を遮った時こそ、私たちは神への強い信仰を行使する必要があるのです。

この例えをさらに広げると、晴天の日に船で旅をしているときは、船長の技量や能力についてあまり考えないかもしれません。しかし、濃い霧が立ち込め、見慣れた目印が見えなくなったときこそ、私たちを無事に目的地へと導いてくれる船長とその能力に感謝するのです。そのような状況下では、船長に全幅の信頼を置く以外に、私たちにできることは何一つありません。　不安や緊張、懸念、疑い、そして心配は、何の役にも立ちません。船長が私たちを導いてくれる間、私たちは信仰をもって待ち続けなければなりません。

これは、私たちの霊的な旅路において、まさにその通りです！　神の摂理の中で、困難な状況から自ら抜け出す術がない時があります。そのような時、私たちにできることは、神こそが私たちを導き通してくださる方であると悟り、神に全幅の信頼を置くこと以外にはありません。（詩篇34:19、コリント人への手紙第二1:9,10）。その時こそ、私たちの窮地が神の機会となるのです。

神はイスラエルの民を窮地へと導かれたのは、彼らが「立ち止まり」、神の救いを見る機会を得るためでした。（出エジプト記14:13）。神は彼らの進路を変え、ピハヒロトへと下らせられました。そこはまさに、肉的な観点からすれば、落胆のあまり心が折れてしまうような場所でした。　エジプトからの解放が完結したかと思えば、彼らは、旅を始めた当初よりも明らかに悪い状況にある　に身を置くことになった。そこで彼らは、すでに彼らのためにこれほど多くのことを成し遂げてくださった神を思い出しただろうか。いいえ。彼らは不

平を言い、泣き叫んだ。彼らの目には、目の前の紅海と、背後のエジプト軍しか映らなかった。彼らは神に信頼を置くことを怠ったため、逃げ道など見出せなかったのである。出エジプト記14:10-12

おそらく私たちもまた、霊的なイスラエルの民として、極限の状況に追い込まれ、前にも後ろにも乗り越えられないような障害が立ちはだかっているのを見ているのかもしれません。主は、いわば私たちを紅海へと導かれるのかもしれません。そこでは、目に見える逃げ道がすべて断たれているように見えるのです。そのような時、私たちは差し迫った破滅を前にして恐れおののくのでしょうか？　そうすべきではありません。なぜなら、まさにそこが、神が私たちを救い出すための絶好の機会となる場所だからです。こうした経験を通してこそ、救いは私たち自身からではなく、神から来るものであるという、極めて必要な教訓を学ぶのです。そのような時こそ、神はかつてモーセというしもべを通してイスラエルの民に語られたように、私たちにこう言われるのです。「恐れてはならない。その場に立ち止まり、主の救いを見よ。」出エジプト記14章13節

私たちが神に委ねるならば、まさにそのような時にこそ、神は私たちの避難の塔、力の塔となってくださるのです。文字通り言えば、森の中で道に迷い、出口が分からなくなった時に、突然、見覚えのある塔が目に入り、そこへたどり着くことができれば安全が約束される、という状況ほど素晴らしいものはありません。　神はまさにそのような力と救いの塔であり、私たちが最も必要としてい

る時に救いをもたらしてくださるのです。（詩篇61:1-3、箴言18:10）。神がいなければ、私たちは絶望の荒野で救いようもなく迷い続けてしまうでしょう。

この記述は、神がイスラエルの民を「ミグドルと海の間」にあるピハヒロトへと導かれたと伝えています。　（出エジプト記14:2；民数記33:7）。ミグドル（Migdol）はヘブライ語で「塔」（　）を意味します。これはなんと重要なことでしょうか！神がイスラエルの民に、避難の塔としてご自身を現されたのは、まさにこの場所でした。神はモーセに、その状況下で何をすべきかを命じられました。これらの指示に従ったことで、ほんの少し前まで彼らの脱出にとって最も越えがたい障壁として立ちはだかっていました海そのものを通って、救いをもたらされたのです。　彼らの前を進んでいた雲は、今や陣営の後方に位置し、エジプト人にとっては闇の柱、イスラエル人にとっては光の柱となり、一晩中、エジプト人が彼らに襲いかかるのを防いだ。（出エジプト記14:19-22）。朝になると、紅海は割れ、彼らはその中を通り抜けて安全の地へとたどり着いた。

霊的なイスラエル人たちは、しばしば神によって許された経験を通し、信仰が試されることがあります。これらは私たちに、「あなたがたは恵みにより、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たものではなく、神の賜物であり、行いによるものではありません。だれも誇ることができないためです。」　（エペソ人への手紙 2:8,9）。私たちが救いを得るのに、自分の力によるの

ではないということを悟ることが、何よりも重要です。時には「立ち止まり」、神の救いを見ることは、非常に必要なことです。これは、無気力な態度や無関心な態度を意味するのではなく、神に対する穏やかな確信を意味します。　それは信仰から生まれる確信であり、私たちに敵対するすべての者よりも、私たちのためにいてくださる方が偉大であるという確信です。（ローマ人への手紙 8:31；ヨハネの手紙一 4:4）。このように神に信頼を置き、神が私たちの道を導かれるままに協力するとき、勝利と救いは確かなものとなります。

神を完全に信じるということは、いかなる状況においても神を信頼することを意味します。　主が「立ち止まれ」と言われる時には主を信頼し、前進せよと命じられる時には信頼して従います。主が前進の命令を下された時に動かないことは、主が立ち止まるよう求められた時に動かないことと同様に、信仰の欠如を露呈することになります。しかし、主の命令に従って立ち止まるにせよ前進するにせよ、私たちの心は常に安らぎの中にあってこそよいのです。なぜなら、私たちは今この瞬間も、主の成し遂げられた御業を悟ることで安息しているからです。　そうして初めて、私たちはキリスト・イエスへの信仰によって備えられている安息に入ることができるのです。（ヘブル人への手紙　4:9-11）。主のために行うすべての働きと、狭い道における私たちの歩みはすべて、主とその約束に対するこの静かで信頼に満ちた安らぎに基づいており、それと調和していなければなりません。それらは、何が起ころうとも、すべてのことが私たちの益となるように働いているという確信を

与えてくれます。 （ローマ人への手紙 8:28）。したがって、道の終わりと、そこで見出される安息のカナンを待ち望みながら、私たちは今この瞬間も、道の争いや困難の只中にあって、「私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださる」神に感謝することができるのです。コリント人への第一の手紙 15:57